

©創通エージェンシー・サンライズ

MG
MASTER GRADE

機動戦士ガンダム
OVA
サンライズ
0071869



MASS PROOF

BANDAI



MOBILE SUIT
RGM-79
GM

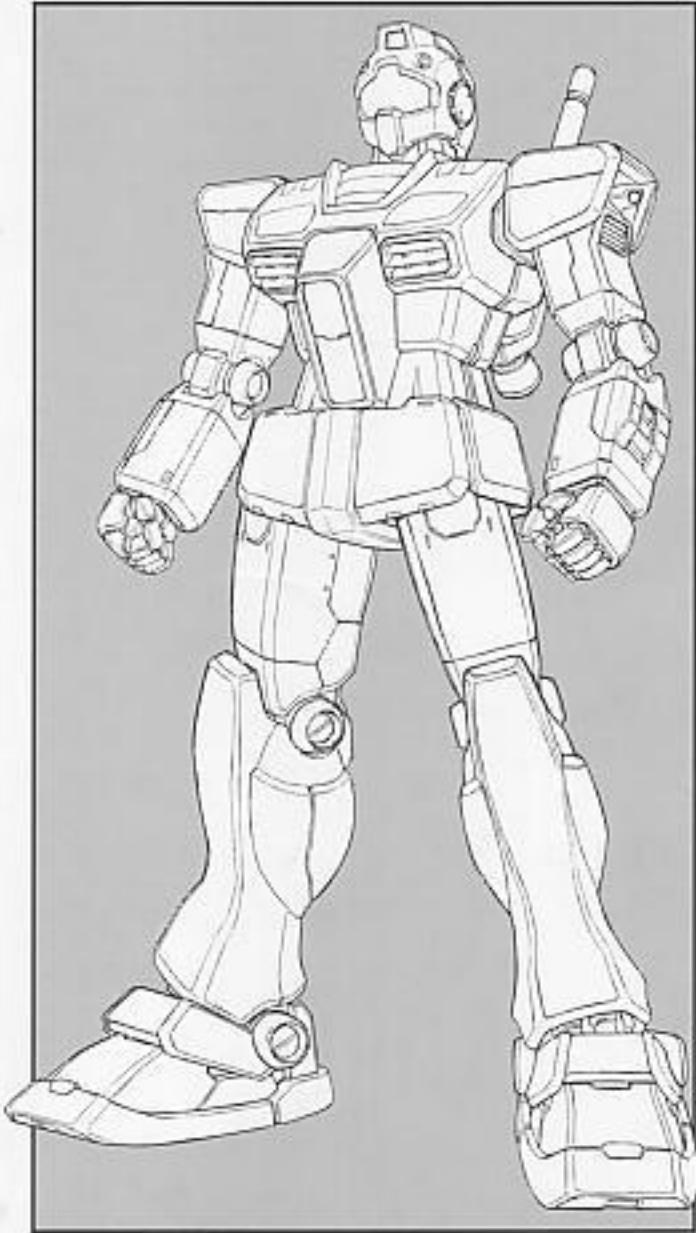
EX-SI.
MASS PRODUCTIVE MOBILE SUIT



BANDAI 1999 MADE IN JAPAN

地球連邦軍量産型モビルスーツ
RGM-79「ジム」
1/100 スケール
マスターグレードモデル





UC.0078年3月。ジオン公国との軍事的緊張が高まる中、連邦軍はひとつ目の極秘計画を発動させた。それが「RX計画」である。RX計画とは、公国軍が開発した新兵器の対抗措置として推進された複数のプロジェクト群のこと。この計画には既存の軍需産業も参画しており、以前より継続していた兵器開発計画も幾つかが組み込まれたと言われている。一説には、公国から亡命した技術者が提供した情報を基づいて、かなり以前から基礎研究が始まっていたというものもあるが、詳細は不明である。ともあれ、翌年初頭に勃発した戦争によって様相が決して後、公国軍製MSの指揮と「V作戦」の発動に伴って、RX計画に連なるプロジェクトは統合され、連邦軍によるMSの実質的な開発が開始されたのであった。

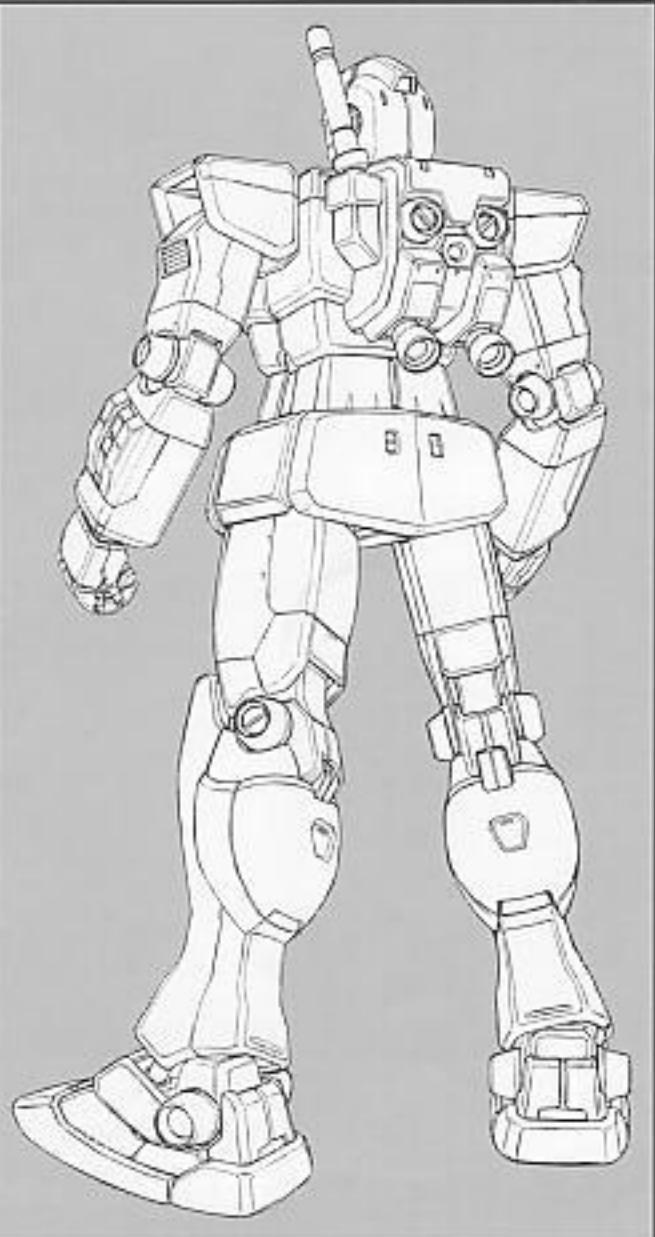
公国軍のMSの威力を目の当たりにした連邦首脳陣は、兵器としては未成熟であったにもかかわらず、研究途上のMSの開発と投入を早々に決定した。計画では、RX-78系の機体の完成を見て量産される予定であったものが、その開発途上の研究結果をもとに試験的に量産され、相当数の機体が先行試作及び量産という形でロールアウトするという状況が生まれた。連邦軍製のMSが、開発初期の段階で互換性の低いバリエーションを多く持つのはこのためでもある。さらに、一旦議会を通過した整備計画を実行するため、性能的な期待値には大きな幅が設けられ、部隊や管轄の違いによって、デザインや性能にかなりの差異が存在することになった。そして、これらの機体は便宜上RX-78系に分類され、この機体を基とした量産型の機体も少しがら量産され、オデッサ作戦の発動までの期間に実戦に投入されていると言う。

本格的な高性能機である「ガンダム」と、その母艦である「ホワイトベース」が完成する頃になると、展開地域や運用用途による量産機の差別化が検討されるようになっていった。そのため、開発時点による規格の違いが是正されてい

く一方で、生産性維持のためのマイナーチェンジが一般化していった。そんな状況の中、RX-78の実働データを基に、本来の整備計画に則って本格的に量産された機体がRGM-79ジムなのである。ただし、この機体の設計が完了する以前にも、同じ制式番号を持つ機体が存在する。基本的には、RX-78をベースとする機体を量産することが本来の生産計画であり、実際、各地の生産設備も暫時標準機の量産ラインに転換していくものの、一部は性能向上のための研究拠点として温存され、独自の機体開発が継続していたと言われている。

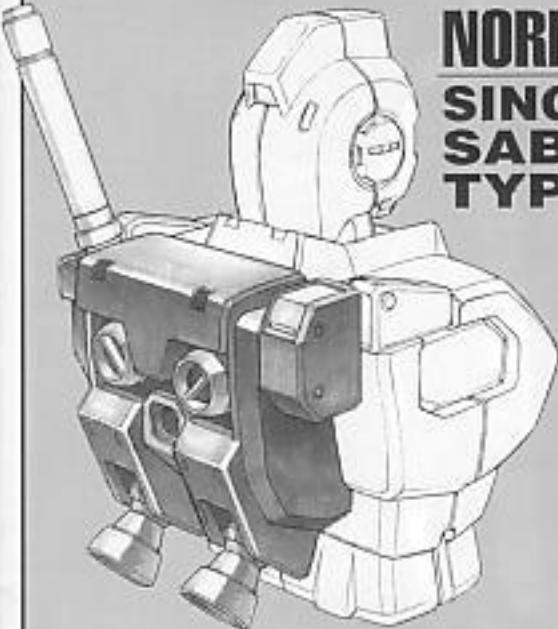
ビーム兵器の小型化に成功した連邦軍は、この兵器を搭載可能な機体の開発と、その時点で量産可能なMSが搭載できるビーム兵器の双方を開発した。最高水準の機体をリファレンスとしながらも、各工廠における部品の歩留まりを平均値とした量産性を両立しようとしたのである。つまり、連邦軍MSの開発当初からの懸念であった「ビーム兵器」の搭載を前提とする一方で、そのデバイスをドライブできる出力を持ったジェネレーターの供給計画に基づいて、機体性能の目標値が下方修正されたのである。当時は標準機の量産が至上命題であり、量産計画のかなり初期の段階で、コア・ブロック・システムと、それに付随する教育型コンピュータ、さらに、複数のジェネレーターを協調稼働させるサブジェネレーター群の採用は放棄されていたのである。

RGM-79 GM

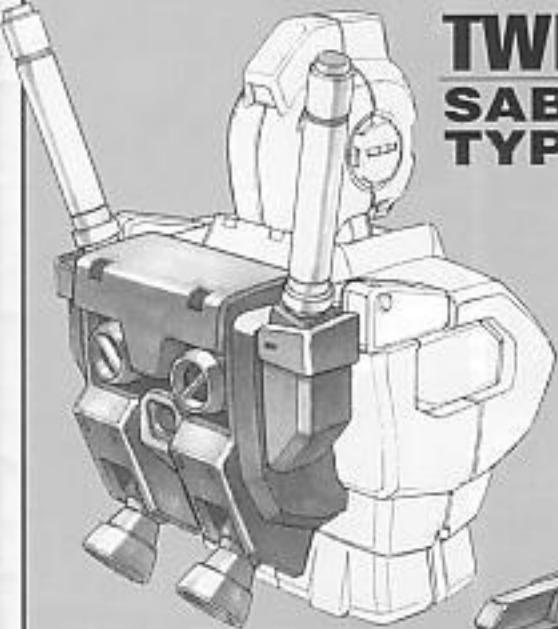


Conceptual illustration: BEE-CRAFT

NORMAL SINGLE SABER TYPE



TWIN SABER TYPE



ただし、この判断は当時の状況からすればやむを得ないものだったと言われている。“ガンダム”に供給されたビームライフルそのものの量産は不可能ではなかったが、エネルギーCAPは開発されたばかりの新技术であり、部品や装置そのものの生産はともかく、兵器としての歩留まりは劣悪だったといわれている。それは、このデバイスの衛星装置と出力が破格の性能を持っていたせいで、そのスペックは理論上の上限を指標とするものであった。しかし、量産を前提とした兵器は、工業製品としての信頼性や機能を保証する必要がある。さらに、“ガンダム”をそのまま量産したのでは、戦争に勝利しても連邦軍が破壊してしまうと言われるほどのコストの問題もあった。それらの問題をクリアするため、ビームサーベルは基本的に一基、主武装はビームスプレーガンとされたのである。無論、ビームサーベルやシールド、バスターなどのスペックは、ほぼ同等で、携行用の専用ラックなども開発されている。ビームスプレーガンにしても、射程や貫通力はともかく、破壊力そのものはビームライフルに匹敵する威力を持っていたのである。そして、その後の量産効果も加味すれば、一種当たりの生産コストは最終的に“ガ

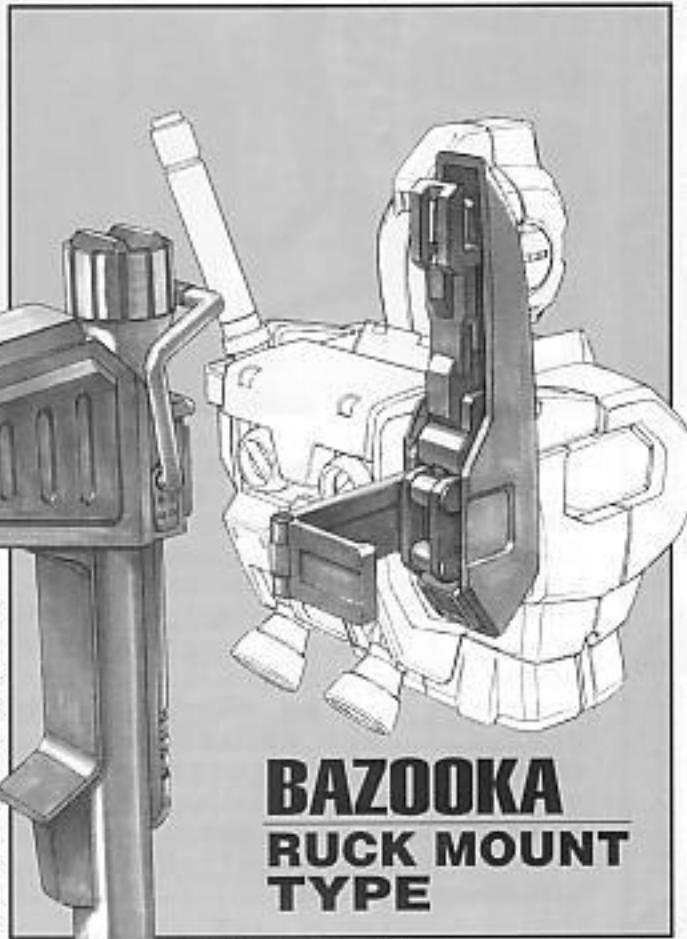
ンダム”的1/20以下にまで抑えられることが可能になったと言われている。中距離支援MSとしてのRX-78系の量産化計画も遅れていたため、代替措置としてSP-WO3型のスペースボットを改造したR-X-79ボールが戦力補充のために配備されるという状況の中、標準機の生産にはある程度の妥協も余地なくされていたのである。

同年8月、サイド7においてRX-78のトライアルが開始され、並行して進んでいた先行量産型の実戦配備も始まった。ただし、この時期に生産された試作量産機は、MSそのものの検証と、既存の艦艇での運用試験及び生産ラインのモデルケースを模索するためのものでもあった。並行して戦線への投入も行われ、それぞれ独自のアビオニクスを持つ機体が少額生産された。これらの機体は、いわゆる激戦区や最前線に投入され、その際には、MSが稼働することが想定される最も過酷な環境（地上では温帯帯や沙漠、宇宙空間では公国軍の制圏など）に優先的に配備されたらしい。それらもまたMSの実戦データを収集するためであったことは言うまでもない。

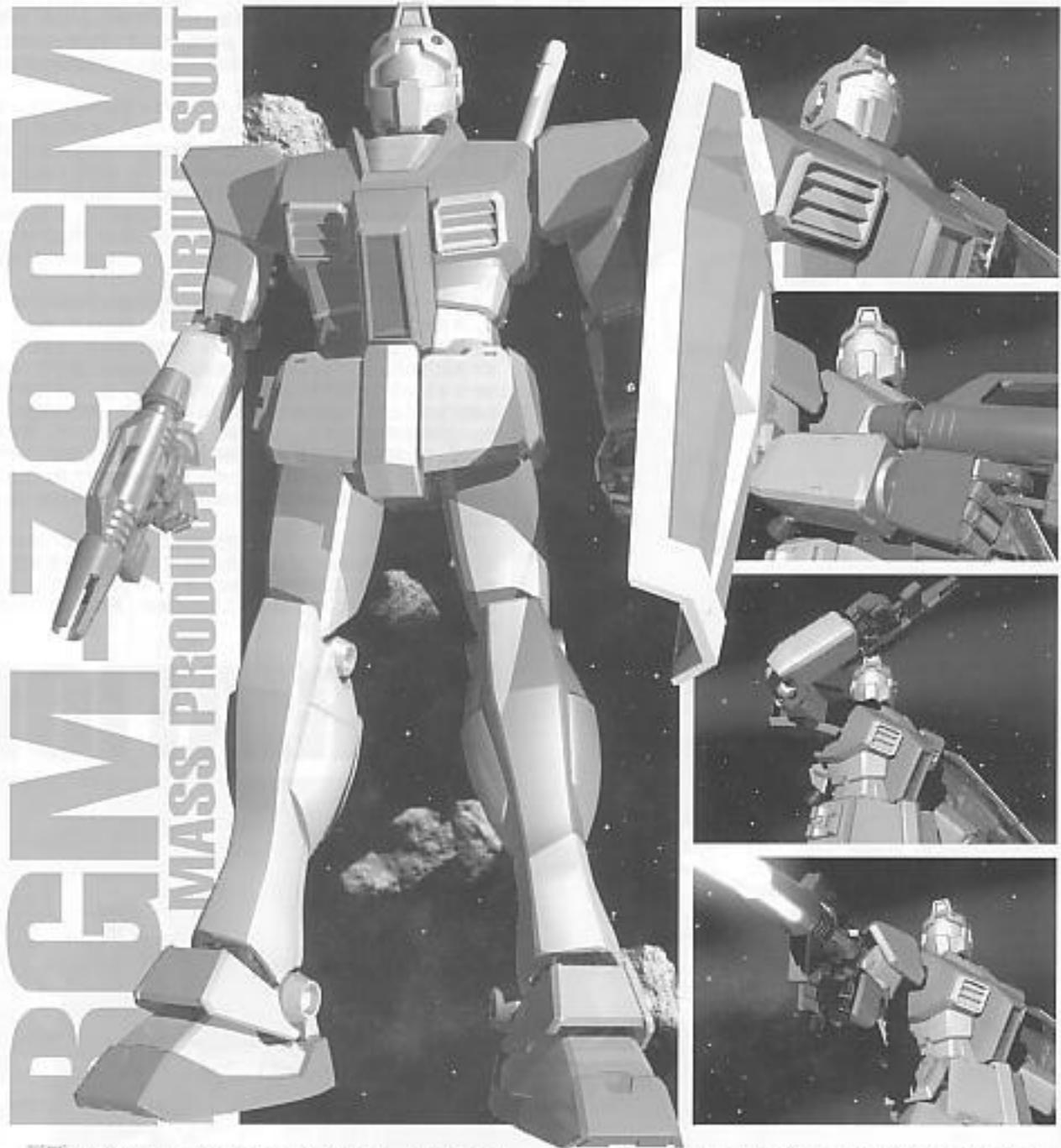
そして、同年10月、PGM-79ジムの本格的な量産が開始された。それは、RX-78の基本構造に基づいて再設計され、脚部やマニピュレーターなどの構造は、モニタリング装置やオプションの種類装備などを除いてほぼそのまま継承された。ただし、いわゆる“万能型”ではなく“余分な”装備をオミットするというコンセプトに基づいていた。つまり、投入する環境をあらかじめ選択することで、一方の装備は不要となる。その分、機体の軽量化とプロペラントの積載が可能となる。この構造は巧妙にシステム化され、基本的にコアブロックと同等の中核ブロックを換装することで、投入環境を選択できるのである。実際、そのブロックを除いた機体部品の共有率は9割以上とされ、ひとつの中核ブロックで地上用と宇宙用の機体を生産することも可能となつたのである。

そして、ジャブローにおける第一次生産機として、地上用の機体が42機生産され、初期の部隊編成に使用された。続いて細部に設計変更が施された後、およそ6ヶ所（同年12月以降に導入されたキャリッフルニアベースなどを含む）を生産拠点として、いわゆる第二次量産機が、終戦までに268機生産されていると言われている。

VARIATION



BAZOOKA RUCK MOUNT TYPE



U.C.0079年7月。サイド7の1パンチコロニーにおいて「ガンダム」一号機を始めとするRXシリーズがロールアウトした。ほぼ同時に、いわゆる「ガンダムを経由しない」MSも開発されていた。これらの機体はガンダムのための基礎設計をもとに、基本的にはMSそのものを検証するためにワン・オフを前提として試作されたもので、便宜上RX-79系というカテゴリーが与えられていた。これらの機体の性能は、当時すでに下方修正されていた標準機の期待スペックを上回り、ガンダムの1/5程度のコストで生産が可能だったため、急遽、先行試作として相当数が量産されることになった。そして、量産が決定されたことで、これらの機体は標準機のコードナンバーとして仮設定されていたRX-79の制式番号を与えられ、専別のため末尾に符号が追加された。それが後のバリエーションにも踏襲されることとなったのである。さらに、ほぼ同型の宇宙用Eタイプも存在するらしく、その戦闘記録も存在していると言う。

また、RX-79を陸戦用に特化した場合を想定した先行量産型なども試作され、カテゴリーナンバーのRX-79が制式番号として与えられている。この機体などは、標準機であるGMほどの量産性は持たないものの、RX-79の基本スペックをほぼ達成していると言われるほど高性能であり、MSの可能性の探索という意味からも注目された。

これらの機体を閲覧した工廠は、本格的な標準機の量産と共に生産ラインが転換される予定であったが、技術士官の要望などもあって、極端な設計変更や規格外品でない限りにおいて、独自の設計に基づく機体を試作、量産する認可を得たのである。それらの技術は標準機であるジムにもフィードバックされ、チューンナップや仕様変更のモデルケースとして多くのノウハウを提供していった。GM系のMSが、投入から3ヶ月前後の期間内に多数のバリエーションを持つのは、こういった事情も関係していると言われている。

RGM-79 GM
Snap Shot

Parts name of
RGM-79 GM

Parts List

Head &
Arm Unit

Leg &
Weapons

Body

Final Assemble

RGM-79 GM

RGM-79 GM
Snap Shot

Parts name of
RGM-79 GM

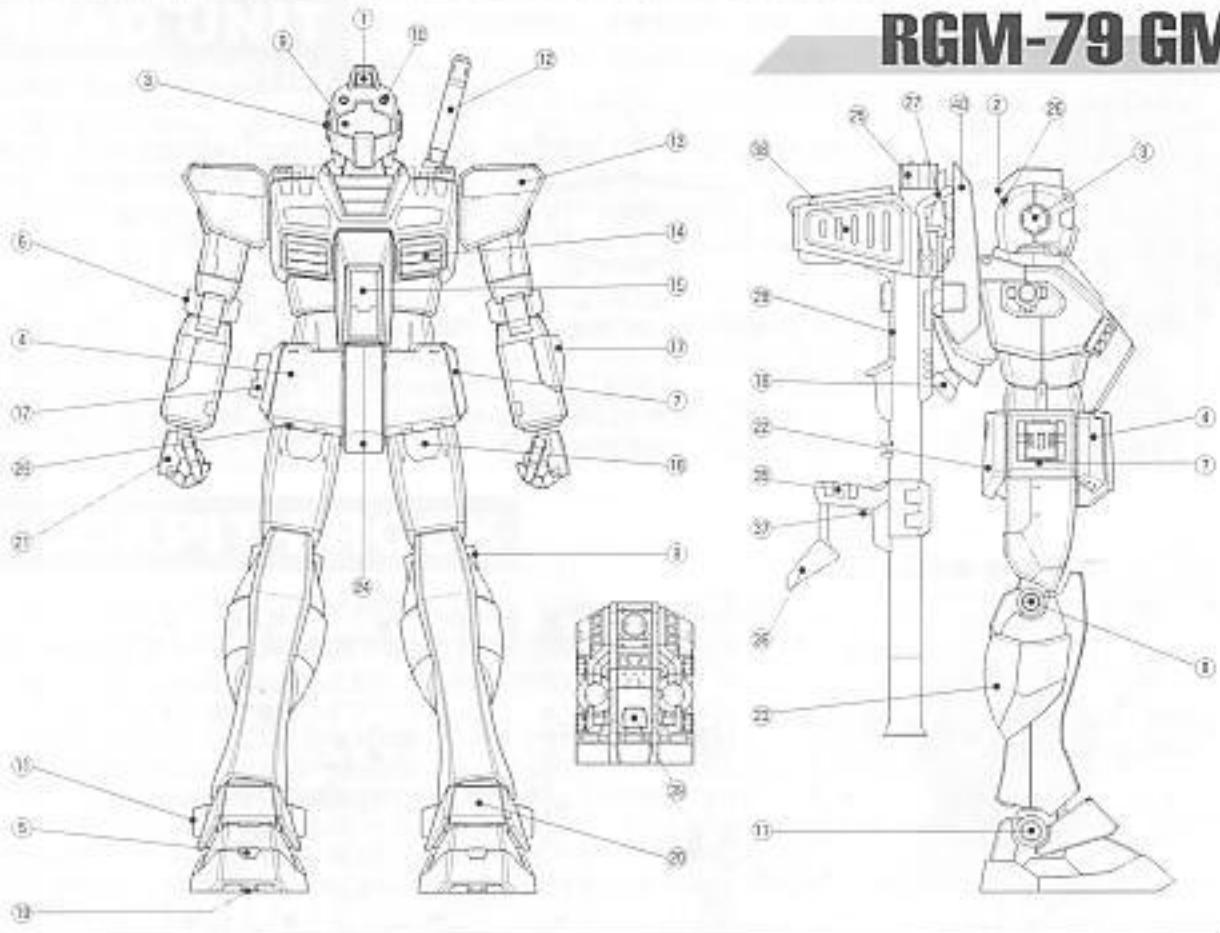
Parts List

Head &
Arm Unit

Leg &
Weapons

Body

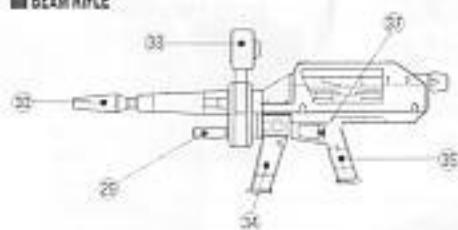
Final Assembly



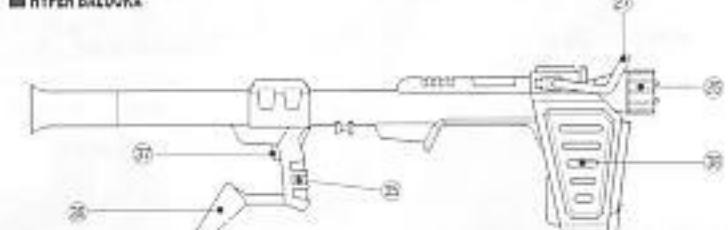
- | | | | | |
|--------------------|-----------------|-----------------|---------------|----------------|
| ① メインカメラ | ⑨ デュアルセンサー | ⑯ マウントラッテ | ㉔ ダクト | ㉚ サイトスコープ |
| ② リアカメラ/センサー | ⑩ 60mmバルカン | ㉑ メインスラスター | ㉕ バランスセンサー | ㉛ フォールディンググリップ |
| ③ サブセンサーアレイ | ㉒ アンクルジョイントアーマー | ㉖ サブスラスター | ㉖ ストラップ | ㉜ グリップ |
| ④ フロントアーマー | ㉓ ビームサーベル | ㉗ 远アンクルサポートユニット | ㉘ ショルダーレースト | ㉝ マスパランサー |
| ⑤ サブシステムコントロールシステム | ㉘ ショルダーアーマー | ㉙ マニピュレーター | ㉙ ショートレンジセンサー | ㉟ トリガー |
| ⑥ エルボージョイントアーマー | ㉔ ダクト/スラスター | ㉚ リアアーマー | ㉚ マズル | ㉟ マガジン |
| ⑦ サイドアーマー | ㉕ コクピットハッチ | ㉛ クローキングサプラスター | ㉛ 直視型ウィンドゥ | ㉛ コクピット |
| ⑧ ニージョイントアーマー | ㉖ メインテナンスハッチ | ㉜ ベンチレートボックス | ㉜ エンブレム | ㉜ バズーカラック |

注) この機体は、第二次生産型に分類される機体群のうち、11月下旬にジャブローにおいてロールアウトした、俗に100番台と呼ばれるバージョンで、レビル艦隊の標準機として配備されたものである。

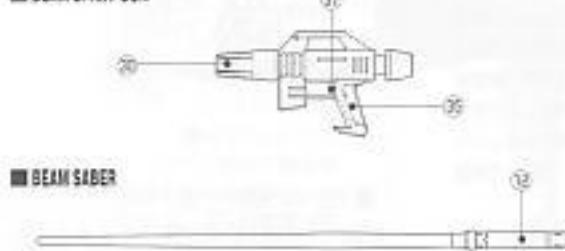
■ BEAM RIFLE



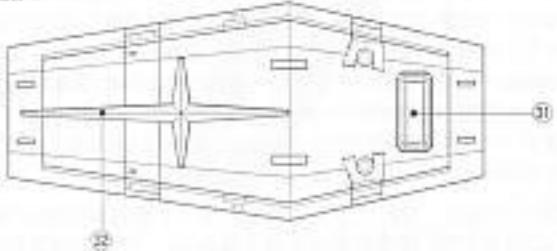
■ HYPER BAZOOKA



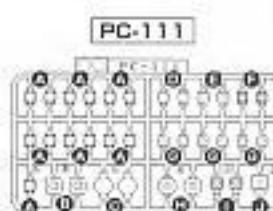
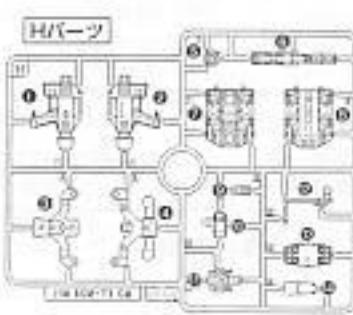
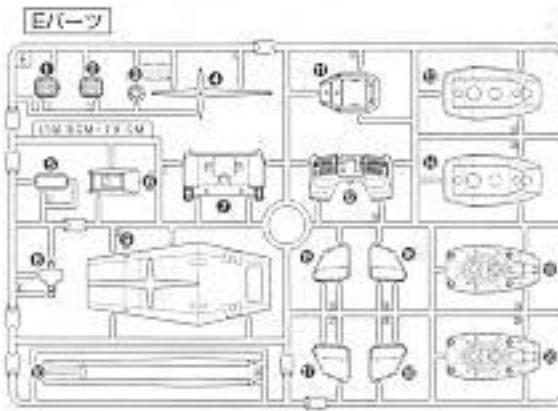
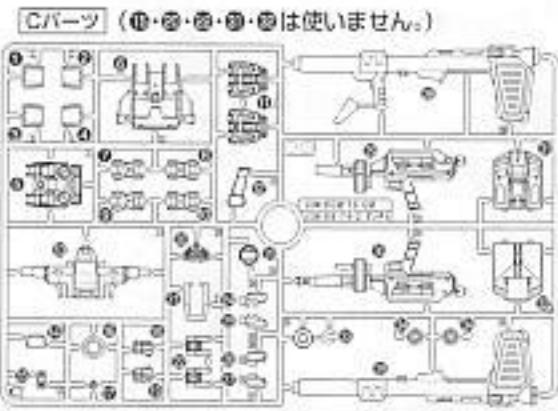
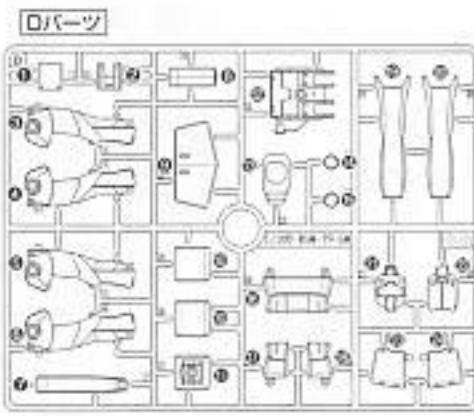
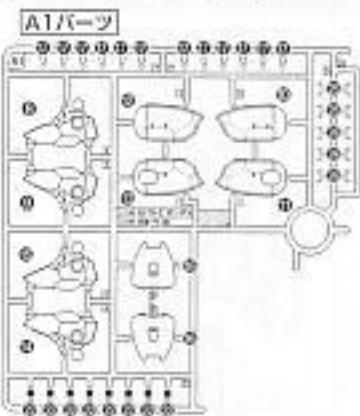
■ BEAM SPRAY GUN



■ SHIELD



パーツリスト



●P.C.⑦個、P.C.⑧1個、
P.C.⑨1個は予備です。
P.C.⑩・⑪・⑫は使いません。

マーキングシール…1枚
ガンダムテカール…1枚
メッシュ……2枚

《お買い上げのお客様へ》

商品についてお気づきの点がございましたら、お客様相談センターまでお問い合わせください。また、部品をごわしたり、なくした人には実費にてお分けします。「部品注文カード」に必要な部品の番号・数量をはっきり書いて切り取り、普通郵便または定額小為替で下記までお申し込みください。代金は部品代（1個40円×個数）+郵送料（120円）+為替手数料（金額によって異なります）です。為替証書は併記入（白紙）で封緘してください。なお、部品の形状・重量で郵送料に過不足が生じるときがあります。部品発送の際に120円を超える時は不足分を請求、120円以下の時には残額をお返しいたします。もし部品に不良品がございましたら、その部品を切り取り、商品名を書いて、下記まで封書でお送りください。良品と交換させていただきます。

■申し込み先 (株)バンダイ静岡工場 お客様相談センター・部品係
〒424-8735 静岡県清水市西久保305 TEL0543-65-5315

部品注文カード 71869-2500
1/100SCALE MGシリーズ
RGM-79 GM

必要な部品の番号・数量をかく

●注文された項目(□で囲む)にわざなくした
部品の注文は「普通為替」か「定額小為替」をお願いいたします。

1999.2/T-ON

'99.2

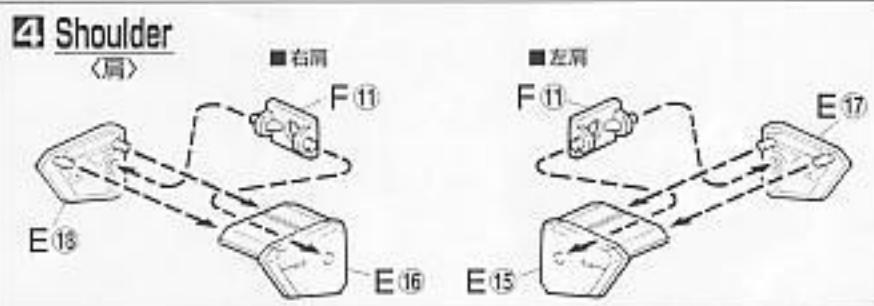
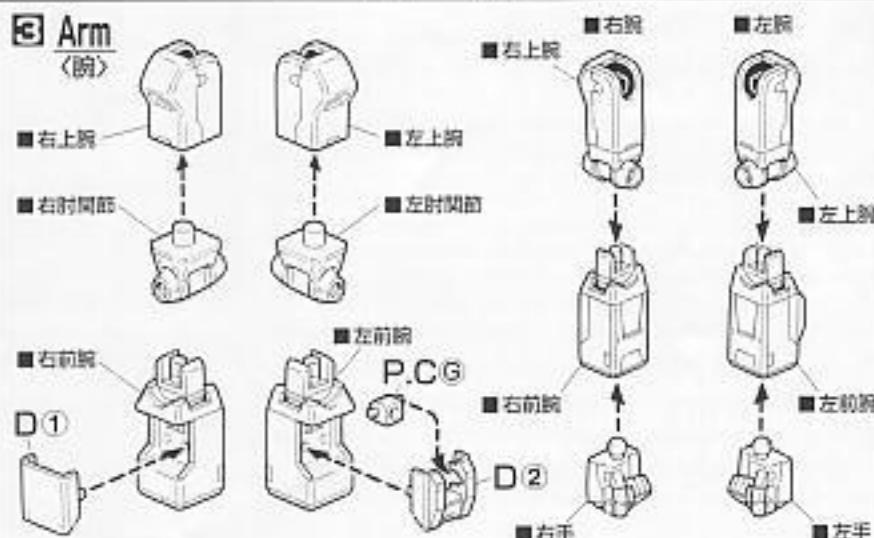
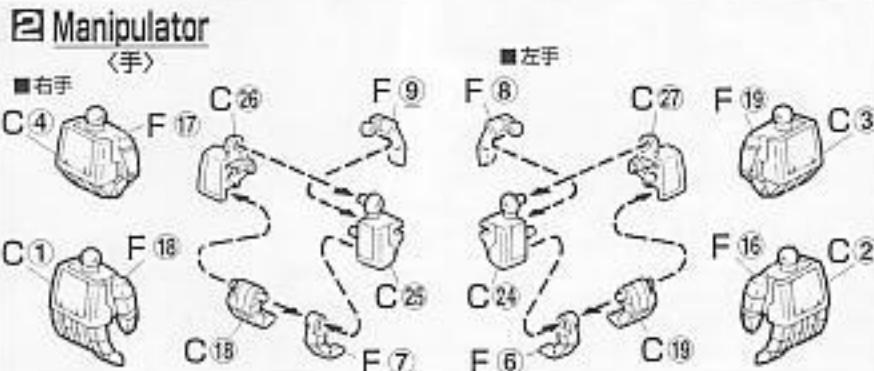
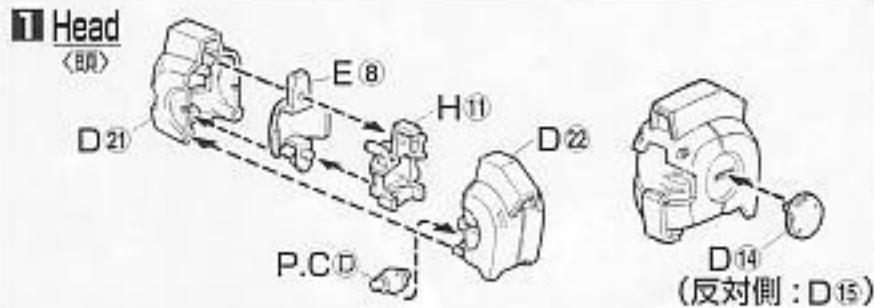
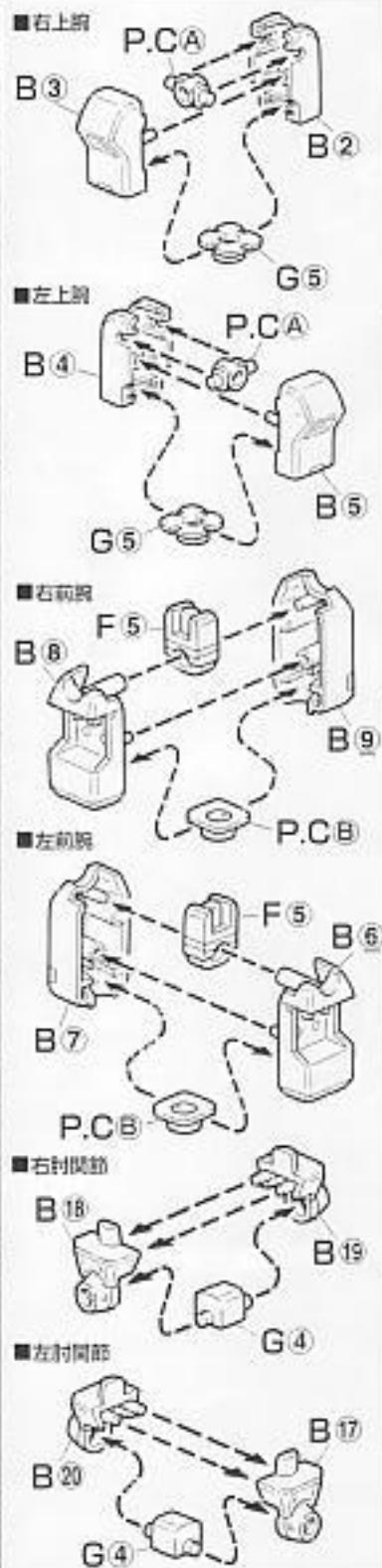
△注意

必ずお読みください

- この商品の対象年齢は15才以上です。(小さい部品がありますので、安全上15才未満には適しません。)
- 小さな部品があります。口の中には絶対に入れないでください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭から被ったり、頭を撞ったりしないでください。窒息するおそれがあります。
- 小さなお子様のいるご家庭では、お子様の手の届かないところへ保管し、お子様には絶対に与えないでください。

組み立てる時の注意

- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
- 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。切り取った後のクズは捨ててください。
- 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
- 部品の中には、やむをえず、とがったところがあるものもありますが、気をつけて組み立ててください。
- 塗装にはより安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。



JABURO

U.C.0079年11月30日、公闘軍は、連邦軍の総合参謀本部の所在地である南米のジャブロー陣下作戦を展開した。この作戦は、オッサでの敗北を挽回するための超死誕生の筋であった。しかし、ジャブローの攻撃は囮を組め、すでに量産型MS「ジム」を発売、実戦配備していた連邦軍の予想外の反撃に遭った公闘軍は結局、敗北を喫してしまう。そして戦闘の主舞台は宇宙へと移行していった……。



SOLOMON

U.C.0079年12月14日、連邦軍は初出陣の奇襲を目的とした「星一場作戦」を発動した。宇宙艦隊がジャブロー基地から基地と軌道上に打ち上げられ、ルナツー艦隊と合流。連邦軍の戦力は、レビル艦隊、ティアラム艦隊と合わせ、正規艦母×12、補助艦母×36、戦艦、重巡洋艦×12、宇宙船×144、魔晄艦及びUMS×600を超えていたと言う。そして同年12月24日、ソロモン攻撃戦が展開された。これらの戦いにおける「ジム」の活躍は目覚ましく、支援の「ボル」ともスムーズに連携を行った。

ABAQAU

U.C.0079年12月31日、ソーラ・レイの奇襲によって、全艦隊の均半数を喪失した連邦宇宙艦隊だったが、ジョン本園を最終目標とする戦略は継続され、ア・バオア・クー攻撃が発動した。連邦宇宙艦隊は、ア・バオア・クーを艦砲射撃で牽制しつつ、MSの大群隊による上陸作戦を展開。ヒーム兵器を標準装備とする連邦軍MSは直面に戦闘を擧げていった。この戦いは、最終的には連邦軍が、その圧倒的な物量にものを言わせて勝利をもぎ取ったとされているものの、開始当初から対MS戦力を想定して開発されたジムの基本性能の高さがなければ、その性能を有効に発揮することはできなかっただろう。



MARKING

機体各部をリアルに再現するナンバー表記、注意書き等のマーキングシールをセット。形式番号等のマーキングを要望の高いガンダムデカールで再現しました。



WEAPONS



PAINTING

よりリアルに仕上げたい場合は、下の塗装色をご覧ください。
塗装には、より安全な「水性漆料」のご使用をおすすめします。

- 本体頭・腕・脚部分などの塗装色。
ホワイト(30%)+インディゴ(15%)+ティトナグリーン(15%)
- 本体胸などの塗装色。
ゼンジレッド(30%)+シャインレッド(60%)+オレンジ(10%)
- 腕部・武器などの塗装色。
ニュートラルグレー(80%)+パープル(10%)
- 本体インテークなどの塗装色。
イエロー(90%)+オレンジイエロー(10%)
- カメラなどの塗装色。
クリヤーグリーン(100%)
- コクピットシャッターなどの塗装色。
つや消しブラック(100%)
- サーベルクリップ・シールドフチなどの塗装色。
ホワイト(100%)

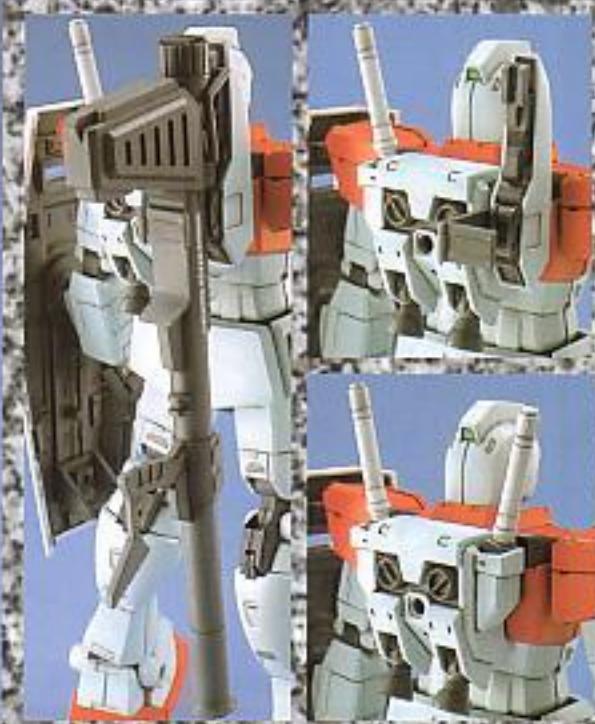
FRONT VIEW

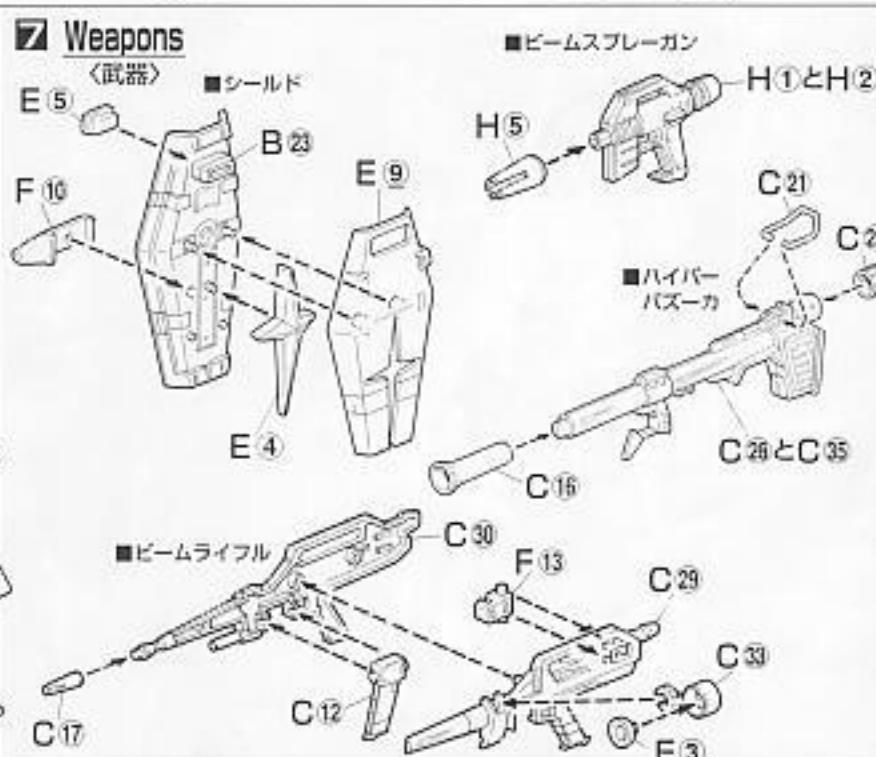
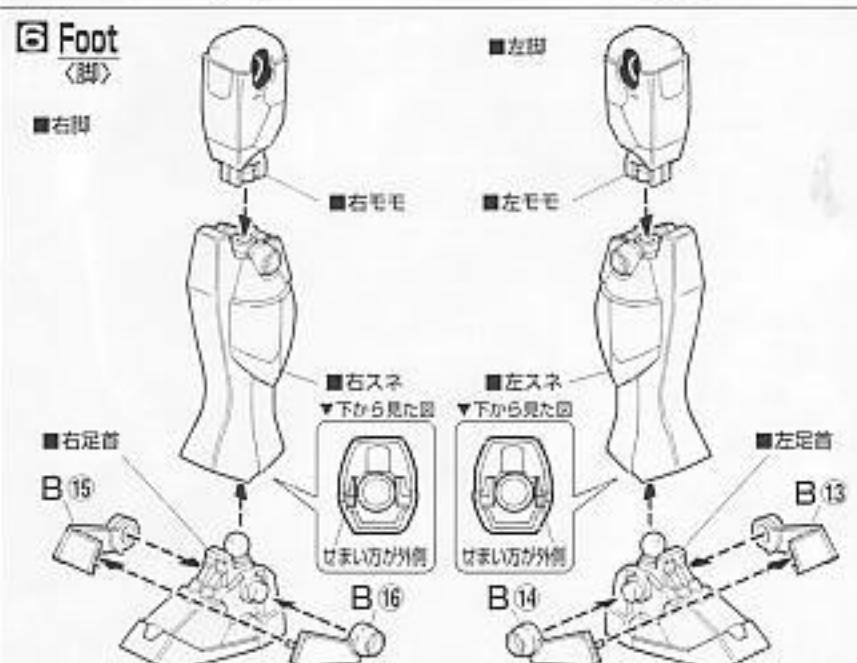
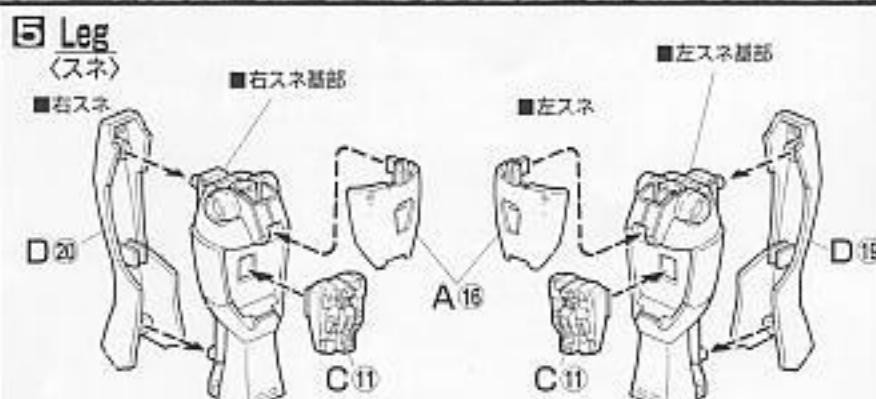
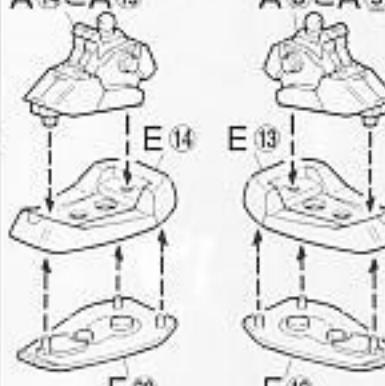
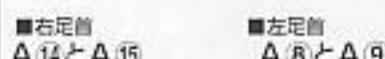
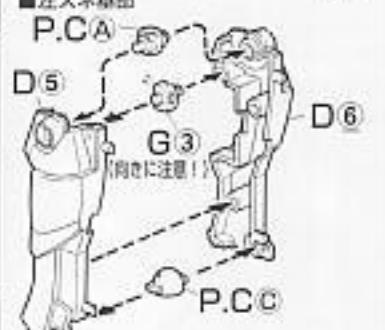
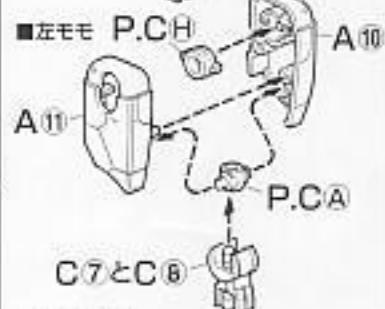
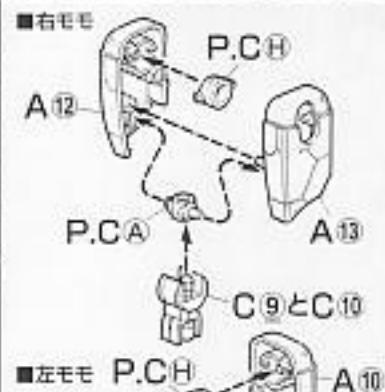


REAR VIEW



バックパックのバリエーションとして、サーベル2本出しのタイプやバズーカ装着用のアタッチメントユニット装備タイプを再現。

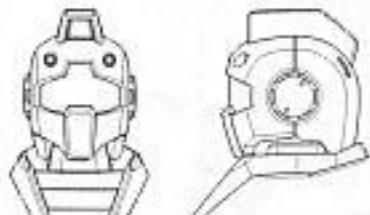




HEAD UNIT

HU-0079D5 Serial 01194

RGM-79の頭部は、ガンダムと同様センサー類の集合体であることに変わりはない。基本構造はほぼ同等で、光学端末がデュアル構成されるシステムも搭載されている。また、各種のデバイスやセ



RGM-79の頭部は、生産性の向上を第一義としている。基本的には“ガンダム”的頭部の構造を簡素化し、極力少ない工程で造りきるように、設計されているのである。

ンサー類は、機能を維持したまま小型化され、さらに高密度で実装されており、生産性の向上に寄与している。ただし、データ収集や機動ソフトの開発に必要だった制御的なコ・プロセッサーフレームとしての機能やモニタリング用装置など、各種のサブシステムは簡略化されている。逆に、近接武装として非常に有効である頭部パルカン砲などは、装弾数が増量されており、基本的には近距離射撃および近接戦闘や白兵に主眼をおいた設計に変更されていると言えることができるだろう。さらに、運用目的によって改修が随時行えるよう、各部の配線などが改善され、いわゆるカスタム化やチューンナップが容易に行えるよう配慮されている。

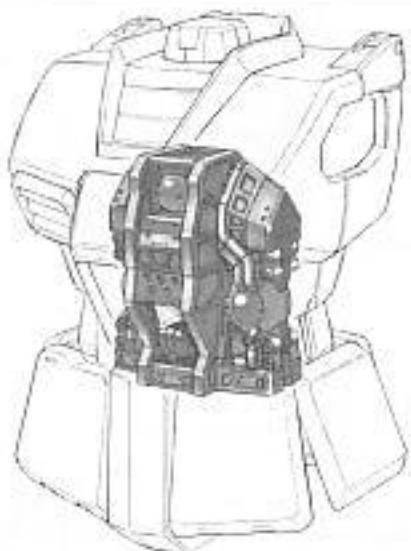


COCKPIT BLOCK

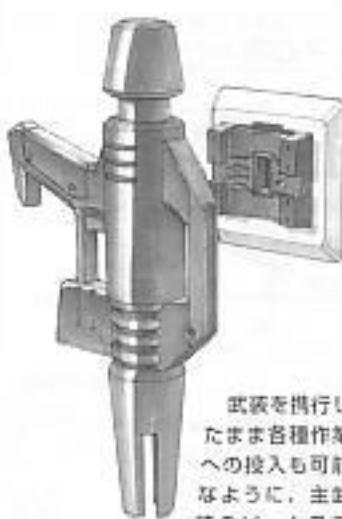
RGM-79のコクピットは、ガンダムのコクピットの構造を踏襲し、航空／宇宙機を基本とした探査感覚で扱えるように配慮されている。そのため、パイロットの配置転換も比較的スムーズに行えたのである。

RGM-79のコクピットブロックは、構造的にコアブロックを参考として設計されている。基礎構造として、ジェネレーターやコンピューターのメインフレームそのものが制御／脱出装置を取り巻く形で配置されており、“航空機”としての機能が排除された分、RX-78が頭部に装備していたヘリウムコアやプロペラントタンクなどを内蔵することが可能となったのである。そして、機体そのものを流用したまま、外観上、ほぼ同型のブロックを換装するだけで、宇宙用か地上用に特化することが可能となっているのである。

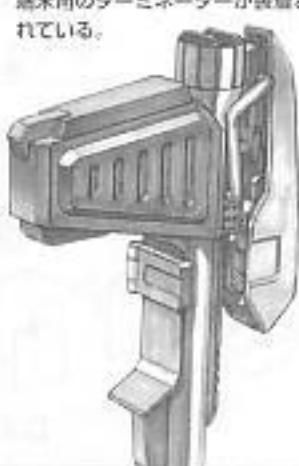
これは本来量産の効率化のために採られた措置であったが、生産工程や整備手順が複雑化されたため、機体そのものにコ・ジェネレーターなどの追加装備を施すだけで、出力のチューンナップや砂漠戦、狙撃任務などに投入するためのカスタム化が比較的簡単に施せるようになった。



MOUNT LATCH



武装を携行したまま各種作業への投入も可能なよう、主武装のビームスプレーガン用のラッチが設けてある機体も多い。性能状態でなければ、時間はかかるがエネルギーの充電が可能な機種もあったらしい。



RGM-79には、ガンダムなどの試作機の実戦投入によって得られた運用データが反映されており、各種の用途や武装バリエーションに応じて、それらの兵器を携行するための装備が豊富に用意されている。

バズーカ用のラックは、機体を砲撃時に投入する場合、あるいは複数の武装を携行する場合などに装備される。通常はエネルギーを無くすため、パワーサプライ端末用のサーミネーターが装着されている。



防御装備としては有効なシールドだが、通常はマニピュレーターで保持し続いていると部品の消耗率が上がってしまうため、腕部にある程度の自由度を持つラッチが装備された機種もあった。

RGM-79 GM Snap Shot

Parts name of RGM-79 GM

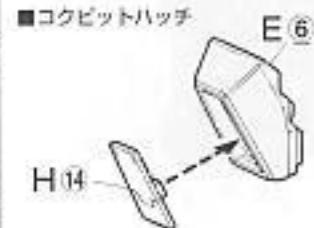
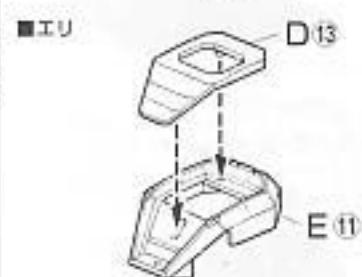
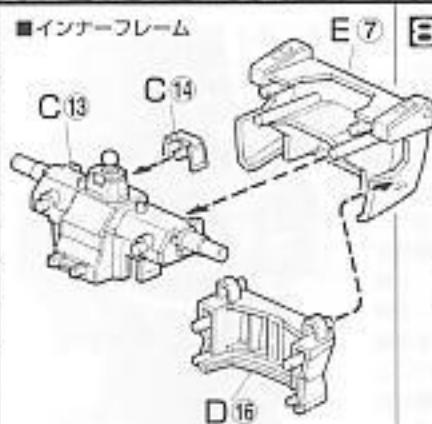
Parts List

Head & Arm Unit

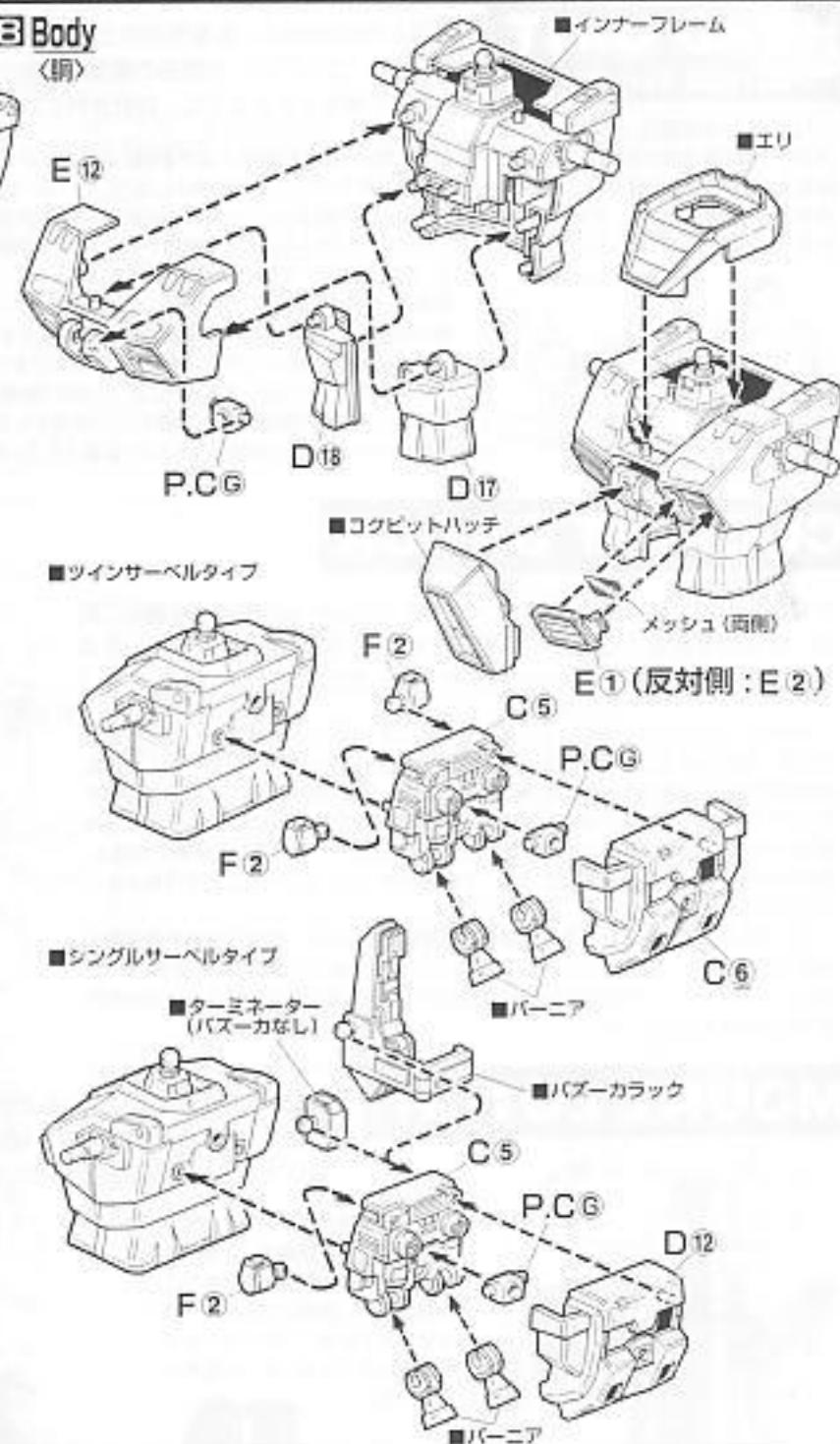
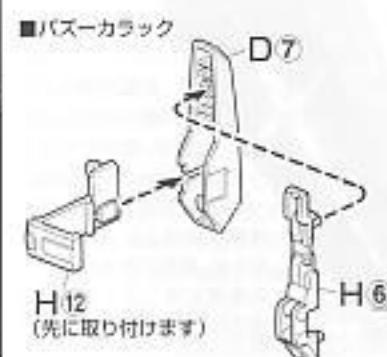
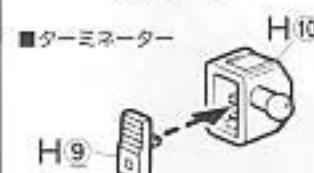
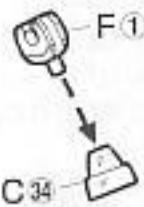
Leg & Weapons

Body

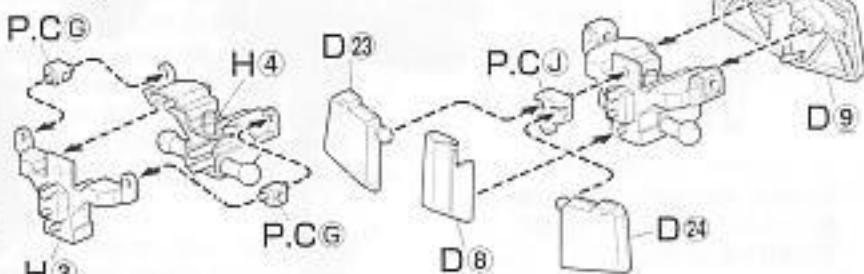
Final Assemble



■バニア
※2個作ります。



Waist (腰)



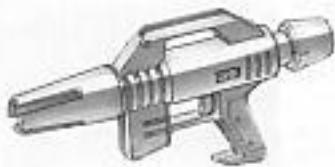
WEAPONS

H-Baz-87-A・E/Ver.009
A・E-Br・XBR-87-D
A・E-Br・G-Sc-L
RX・M-Sh-VT/S-008
VCU-505EX-V・B/Ver.021



BEAM SABER

RGM-79が装備するビームサーベルは、基本的にRX-78のものと同じ性能を持つが、オプションとして近接戦闘用でいたジャベリングタイプのものばかりとされている。



BEAM SPRAY GUN

RX-78のビームライフルに比べて射程は短いものの、近距離では十分な効果を発揮する。ただし、MS-14以前の機体の装甲には耐ビーム処理が施されているものが多く、近接戦闘を余儀なくされるケース多かったと言われている。



BEAM RIFLE

ガンダムに供給されたビームライフルは、当時の戦闘機の破壊力を持つ。当然、ジムもこの兵器の搭載を前提としていたが、生産性が低かったため、実際に供給された機体は決して多くはない。また、主に生産性の向上を目的とした新規設計のビームライフルも開発実験されたとも言われている。



SHIELD

連邦軍のMS標準装備される防護装備。堅牢さよりも重量収納/搭載を目的としている。防御装置のフレンドシップリティをさらに向上させるため、マウントラッチャスライドハンドルなどが改良されている。



HYPER BAZOOKA

RGM-79が使用したバズーカの名前は、RX-78に装備されているものの両等である。300mmの各種弾頭を専用作薬で射出することができる。

SYSTEMATIC

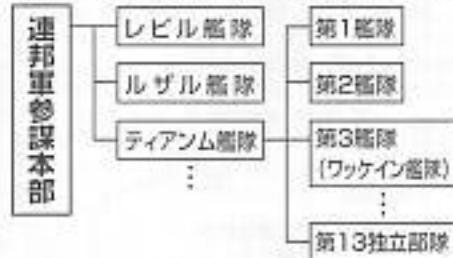
「V作戦」は、公認軍がMSの開発に伴って展開した新たな戦略体系の対抗措置として推進された。連邦軍においてMSは、前衛戦闘機や戦闘車両などに代わる戦闘ユニットとして期待されていた。そのため、運用においても既成の概念が適用され、部隊構成や指揮系統も認可された。

それら既存の概念に基づいていたが、適性や任務の諸条件、あるいは兵士の持続性や乗組期間の規定などによって、例えば「パイロットは尉官以上でなければならぬ」という制限などはかなり是正された。それまでは、年功序列や資格がばかり通っていた連邦軍という組織。初めて窓穴が開けられたと言えは聞こえはいいが、これまでの重厚なる戦財で多くの正規軍人が喪失したため、士官候補生や予備役などを大量に登用しなければならなかつたというのが実情である。ともあれ、それらの指揮の一環として、準尉以下の階級を持つパイロットも多く輩出されたのである。

これら善後策としての構成はMSの配備も同様で、地上においては戦車や歩兵砲、宇宙においては戦闘機とMSなどの組み合わせによる混成部隊も相当数に上っている。

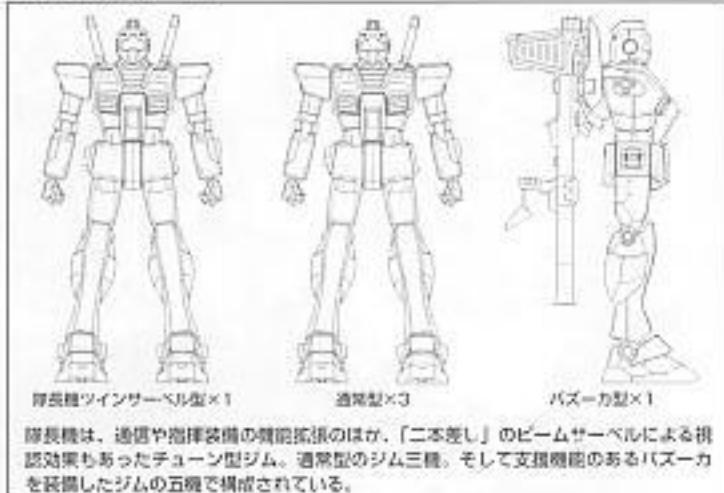
宇宙艦隊に所属するジム部隊の基本構成は、小隊長が五種類の小隊を指揮し、三つの小隊を中隊長が指揮する。中隊長はいずれかの小隊長が兼任することも多かったという。三つの中隊によって大隊が構成され、大隊長は艦長の艦長を兼任する場合もあった。通常の指揮系統が機能していれば、連隊や旅団、師団といった括りも存在するが、「星一号作戦」においては、それぞれの艦隊が大隊として機能し、中隊がMSの戦闘、支援ユニットとして小規模な艦隊を構成して遊撃隊として機能する場合もあった。

■ソロモン攻略時の指揮系統と部隊編成



RGM-79は、既存の兵器体系との置換を前提とした配備計画に沿って供給される予定だった。しかし、RGC-80の量産が遅れていたことによって、当初の構想通りの編成を達成できた部隊はわずかだったと言われている。

■小隊構成の一例



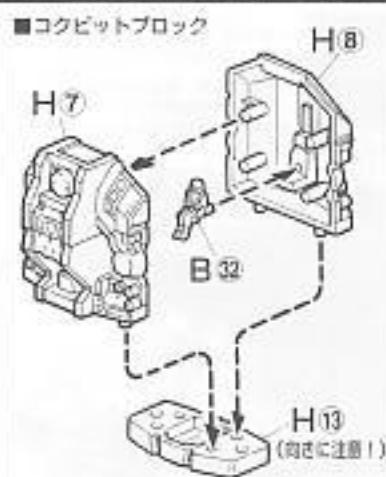
第1小隊(ハンターフィールド隊)
【隊長機ツインサーベル型×1、通常型×3、バズーカ型×1】

第2小隊(ピーチマウンテン隊)
【隊長機バズーカ型×1、RGC-80型×2、ボール×2】

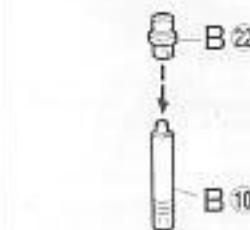
第3小隊(ベルウッド隊)
【隊長機通常型×1、通常型×2、バズーカ型×2】

第4小隊(リバーマウス隊)
【隊長機ツインキャノン型ボール×1、ボール×4】

第5小隊(ウインフォークス隊)
【隊長機スナイパーカスタム型×1、ジムコマンド型×4】



■ビームサーベル ≈2組作ります。



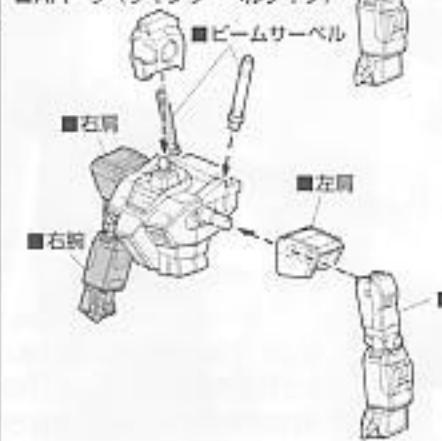
II A.B Parts

〈A.B パーツ〉

■Aパーツ (シングルサーベルタイプ)

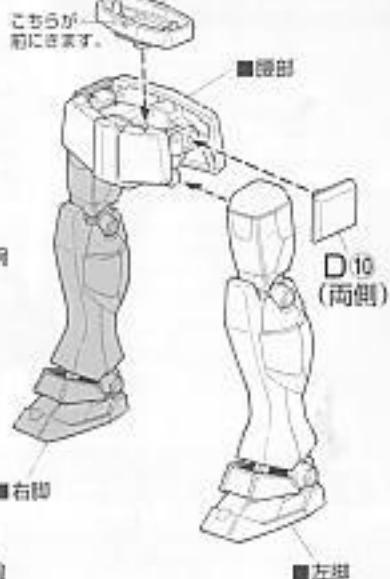


■Aパーツ (ツインサーベルタイプ)



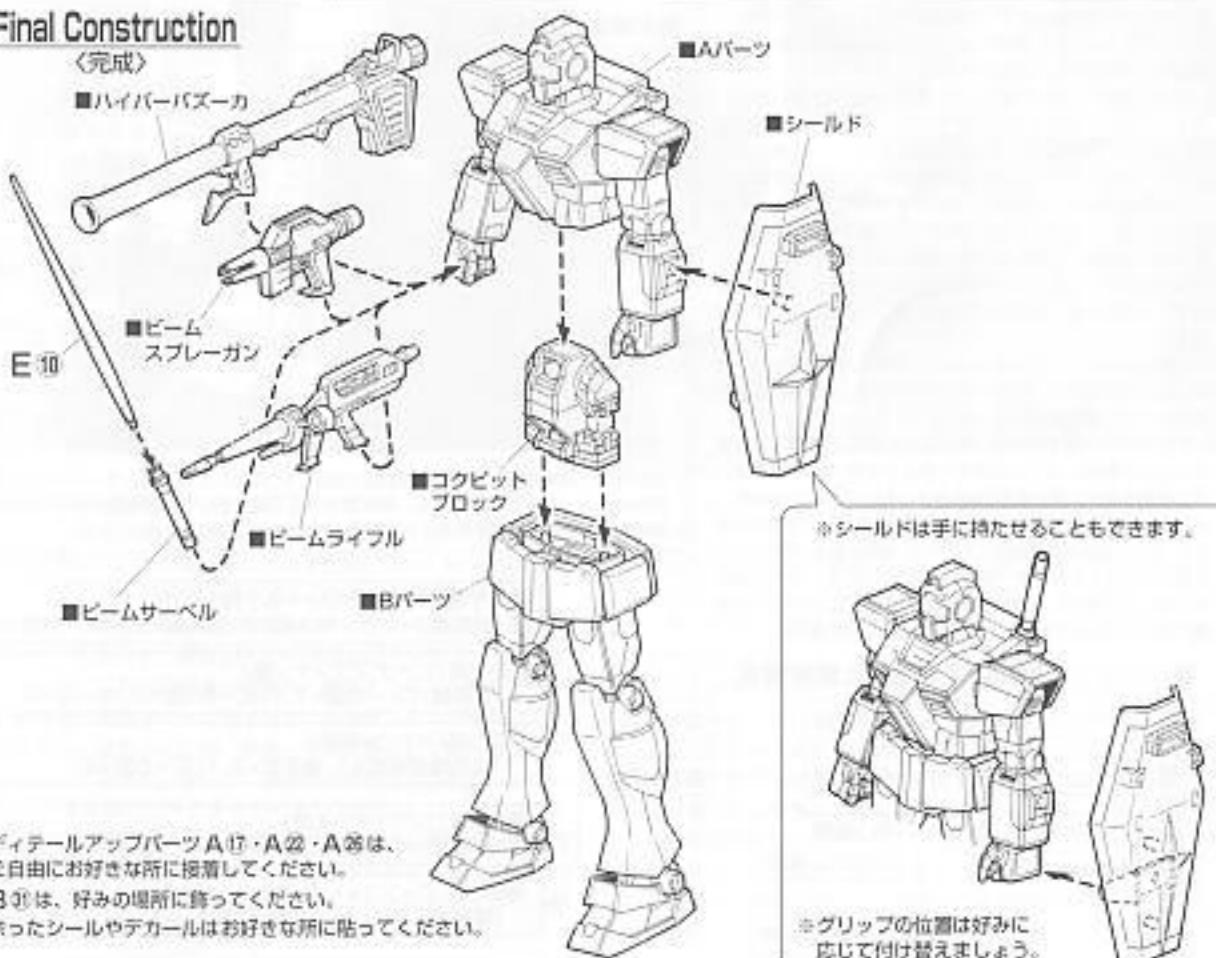
■Bパーツ

F15



III Final Construction

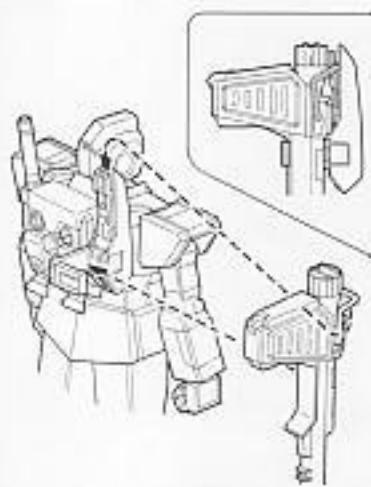
〈完成〉



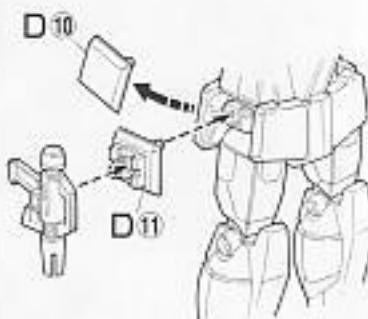
12 Weapons Equipment

<武器の取り付け>

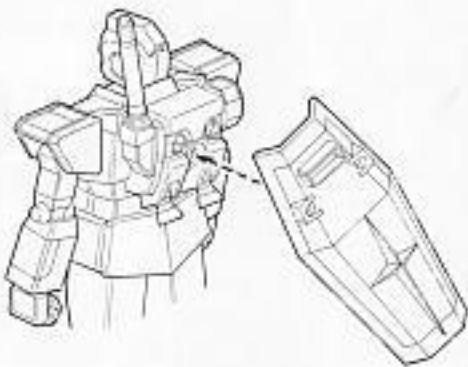
■ハイバーバスカ



■ビームスプレーガン



■シールド

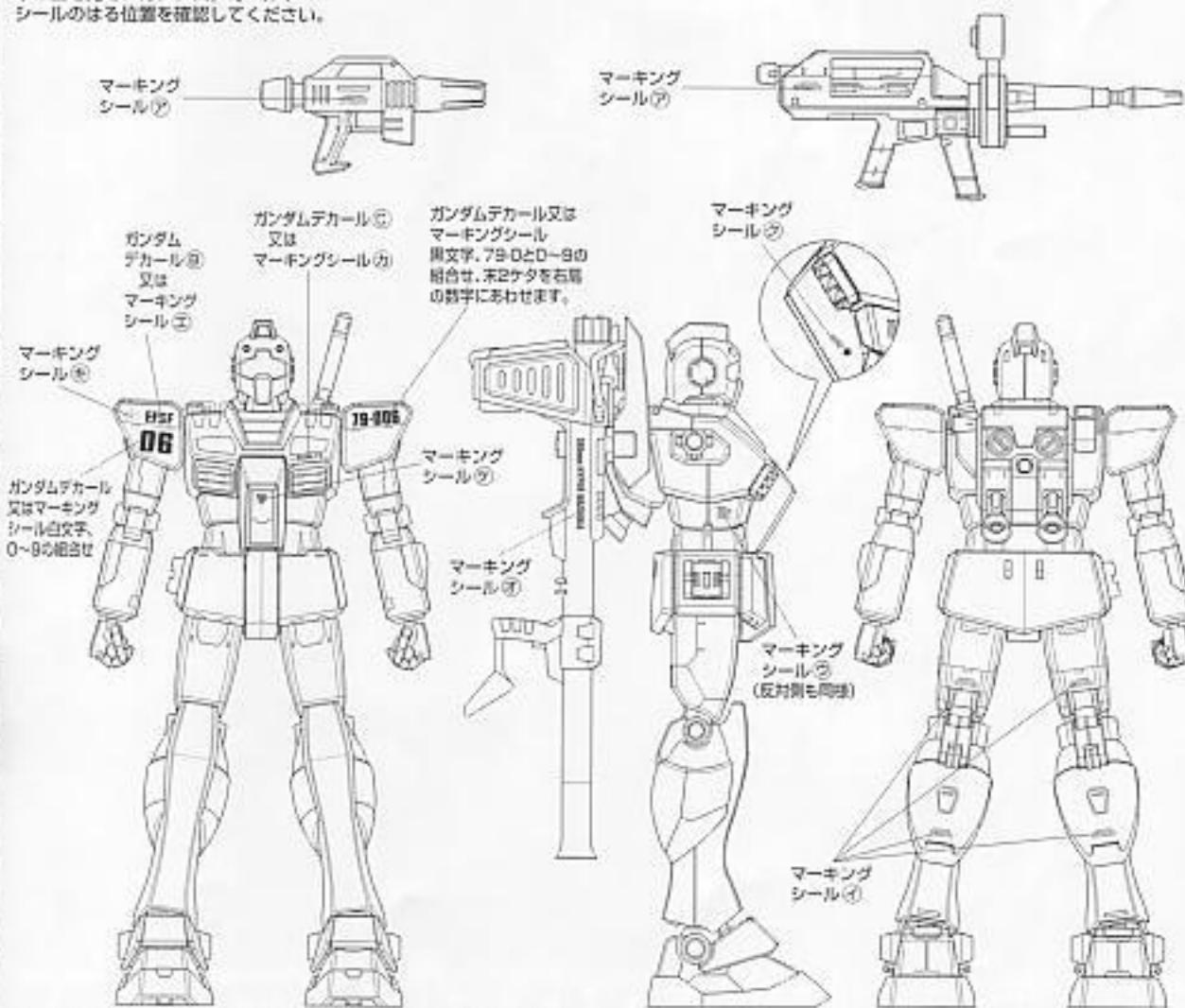
**Seal**

<シール>

ガンダムデカールのはりかた。

1. 転写するマークを大まかに切れます。
2. 転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
3. シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。

下の図を見て、ガンダムデカールやシールのはる位置を確認してください。



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。



協力：ホビージャパン



地球連邦軍量産型モビルスーツ
RGM-79「ジム」
1/100 スケール
マスターグレードモデル

RGM-79 GM
E.F.S.F. MASS PRODUCTIVE MOBILE SUIT

Scanned by Dalong.net